早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

がんサバイバーの行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響

The Effect of Behavior Style and Reward Perception on Psychological Adjustment in Cancer Survivors

2022 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
畑　琴音
HATA, Kotone

研究指導担当教員：　鈴木　伸一　教授

がんサバイバーの行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響

The Effect of Behavior Style and Reward Perception on Psychological Adjustment in Cancer Survivors

畑　琴音（HATA, Kotone）　指導：鈴木　伸一

がん医療の発展に伴い，がんの生存率は改善し，がんサバイバーの療養生活と社会生活の両立が推進されている。本博士学位論文では，がんサバイバーの回避的な行動様式が心理適応にどのように影響を及ぼすかを明らかにした上で，がんサバイバーの心理適応の向上を目指した介入プログラムを開発し，その効果を検討することを目的とした。本博士学位論文は全７章から構成されている。

第１章　がんサバイバーの行動様式と報酬知覚に関する研究動向と課題

本邦におけるがんサバイバーシップの現状とがんサバイバーの心理適応に関連する要因や，具体的な心理的支援について概観したうえで，これまでのがんサバイバーの心理適応に関する研究動向における問題点を整理した。これまでの研究では，療養生活の中で抱える苦痛・困難の軽減が主たる支援目標とされてきた。一方で，近年はがんサバイバーが，人生の豊かさや生きがいを感じながら生活していくことを支援することの重要性も指摘されている（厚生労働省，2018）。こうしたがんサバイバーの前向きな生活を阻害する要因として抑うつや不安が挙げられている（Brown et al., 2010）。

がんサバイバーの抑うつや不安の維持・悪化に関わる要因として，がんサバイバーの回避的な行動様式が挙げられる。がんサバイバーの回避的な行動様式は大きく受動的回避と積極的回避に分けることができる。本論文では，がんサバイバーの受動的回避にあたる概念として活動抑制，積極的回避にあたる概念として，がんの再発や病状悪化への対処努力に着目する。しかしながら，先行研究において，この２つの回避的な行動様式の心理適応との関連は一貫しておらず，回避的な行動様式が他の認知的な要因を媒介し，心理適応に影響を及ぼす可能性が指摘されている（Abdin et al., 2019）。その有力な媒介要因として，報酬知覚が挙げられる（Ciarocchi et al., 2011）。報酬知覚は，その人が生活の中で感じている，生活の豊かさや充実感の程度を表す概念であり，行動様式の頻度や内容だけでなく，行動様式の結果として，生活の中の報酬知覚が変化することで，心理適応に影響を及ぼすことが考えられる。

上記の研究動向を踏まえて，以下の問題点が整理された。すなわち，１）回避的な行動様式を測定する指標が開発されていないこと，２）行動様式が報酬知覚を媒介し心理適応に及ぼす影響が検討されていないこと，３）がんサバイバーがその人らしく生活していくための介入プログラムが体系化されていないことである。これらの問題点を解決するために以下の研究が行われた。

第２章　本論文の目的と臨床的意義

本論文では，回避的な行動様式を測定する尺度を作成し，行動様式が報酬知覚を媒介し，心理適応（不安，抑うつ，Benefit Finding）に及ぼす影響を検討する。さらに，これらの研究で得られた知見から介入プログラムを構成し，その効果を検討することを目的とした。

本論文により，がんサバイバーの人生の豊かさや生きがいに焦点を当てた心理的支援の発展に寄与できることや，がん医療の限界を踏まえた支援を構築するといった点において，臨床的意義があるといえる。なお，本研究は全て早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承諾を得て実施された（承諾番号：2019-054，2019-119，2020-200，2020-347）。

第３章　がんサバイバーの活動抑制尺度の作成と信頼性・妥当性の検討（研究１）

研究１では，問題点１）を解決する一環として，がんサバイバーの活動抑制を測定する尺度である Sickness Impact Profile for Cancer Patients – Revised（SIP-C-R）を作成し，その信頼性と妥当性を検討した。本研究では，がん患者支援団体に所属するがんサバイバー101 名を分析対象として，検討を行った結果，SIP-C-R は２因子構造（11 項目）であることが示され，信頼性と妥当性が確認された。

第４章　がんサバイバーの再発や病状悪化に関する不安・心配の対処努力尺度の作成と信頼性・妥当性の検討（研究２）

研究２では，問題点１）を解決する一環として，がんサバイバーの再発や病状悪化に関する不安・心配の対処努力という新しい構成概念を抽出し，対処努力を測定するための尺度として ERBA-C を開発し，その信頼性と妥当性を検討した。

まず，予備調査においてがんサバイバーやがん領域に携わる専門家，心理学者などを交えたフォーカス・グループ・インタビューを通して新たに生成された。本調査では，がん患者支援団体に所属するがんサバイバー94 名を分析対象として検討を行った結果，対処努力は「病状の変化を確認する」，「心身によい活動をする」と「病前と変わらない生活を送る」の３因子構造（10 項目）で構成されることが示され，信頼性と妥当性も概ね確認された。

第５章　がんサバイバーの行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響（研究３－１，３－２）

研究３では，問題点２）を解決する研究として，がんサバイバーの行動様式が報酬知覚を媒介して心理適応に及ぼす影響を検討した。研究３－１では，がんサバイバー90 名を分析対象とし，活動抑制と「病状の変化を確認する」対処努力が報酬知覚を媒介して心理適応に影響する完全媒介モデルが検討された。さらに，研究３－２として，ベースライン（T1），３か月後（T2），６か月後（T3）の縦断的データを用いて，同様のモデルを検討した。研究３－１と同様の媒介モデルに関して，独立変数に T1，媒介変数に T2，従属変数に T3 のデータを入れた縦断媒介分析を実施した。その結果，完全媒介モデルは部分的に支持された。そのため，補足的に T1 から T2，T1 から T3 で，２つの行動様式と報酬知覚の得点の変化を元に，行動様式が改善し，報酬知覚が向上している群と，行動様式が悪化，報酬知覚が低下している群に群分けをし，縦断的な心理適応の変化を検討した。その結果，６か月時点で回避的な行動様式が増え，報酬知覚が低下している者は，心理適応の悪化が顕著であることが示された。

第６章　がんサバイバーの行動様式と報酬知覚に着目した介入プログラムの開発と効果検討（研究４）

研究４では，問題点３）を解決するために，回避的な態度としての２つの行動様式と報酬知覚に着目した，抑うつや不安を改善するための介入プログラムの効果を検討した。がんサバイバー19 名が対象となり，介入群に 10 名，待機リスト群に 9 名が割り付けられた。主要評価項目として抑うつ，不安と Benefit Finding を設定し，４週間，計５セッションの介入プログラムを実施した。その結果，抑うつ症状に関しては介入プログラム前後で改善し，フォローアップまで介入効果が持続していることが示された。以上の結果から，本介入プログラムの有効性は一部示唆されたといえる。

第７章　総合考察

本研究から，研究１と２で検討された２つの回避的な行動様式（活動抑制と「病状の変化を確認する」対処努力）が増えることで，報酬知覚は低下し，心理適応が悪化するというモデルが，研究３の横断・縦断調査において，一貫して示された。その一方で，研究４では行動様式の改善はみられず，報酬知覚の向上による心理適応の改善が示唆された。しかしながら，研究３においても調査変数間の相関分析や，行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響に関する重回帰分析において，報酬知覚の高い説明率が示されていた。このことから，研究４の介入プログラムを通して，報酬知覚の向上ががんサバイバーの心理適応改善につながっている可能性が考えられる。

本論文の臨床応用可能性として，心理的苦痛の改善だけではなく，ポジティブな面を促進する介入が重要であることを示したという点において，今後のがんサバイバーシップに新しい視点を提供できたと考えられる。さらに，本介入プログラムの臨床応用として，長期的ながんサバイバーシップにおける新たな支援法や，集団形式のプログラムの実践研究としても発展していくことが期待される。最後に，本研究から得られた成果および介入プログラムをがん患者支援団体やピア・サポートの均てん化に向けて活かしていくことが期待される。

以上の本論文で得られた知見は，がんサバイバーの長期的な支援につながるとともに，人間のウェルビーイングの向上に向けた学際的研究に資するものであり，人間科学研究の発展に寄与できるといえる。